柳川先生の御退官に当って

中　村　廣治郎
（昭和38年修士修了）

編集部から，柳川先生の想い出について何か書くようにとの依頼を受けましたが，まだ活躍中の先生について書くのはどうもむつかしい。それはともかく，本当に永い間御苦労様でした，と先づはお慶びを申し上げます。といいますのも，私も五年程前に文学部に移り，イスラム学研究室――とはいえ，宗教学研究室とは比べものにならない位ちっぽけなものですが――を預るようになってから，停年までそれを続けることがいかに大変なことかを日々思い知らされ――むろん，私の無能のためでもありますが――，あと十年無事に任務をまっとう出来ることを祈るような心境だからです。先生とは，年齢の上で十一歳の差がありますので，時々同年前の先生の姿を想い出しては，ああ成程なぁ，と多少は私にもわかるような気がする時があります。

先生に初めてお会いしたのは，確か私が修士課程に入ってからだと思います。あの日，何人かの学生と一緒に研究室にいた時，故岸本先生が柳川先生を連れて来られて，この人がこれから研究室で教えることになる柳川先生だよ，と紹介されました。もっとも，それ以前に，中央図書館の一室での岸本先生のゼミで何度か会っていたような気もしますが。授業では，ラドクリフ＝ブラウン，T．パーソンズ，R．ベラーなどの論文や著作を読まされました。その頃は，まだ今のようにゼロックスはなく，リコピーでテクストをコピーし，研究室中に並べて乾しては使っていたのを想い出します。とにかくその頃の先生は，大ような岸本，大畠両先生と違って若かっただけに，我々ひねた――と思われたかどうか――院生にとっては一番油断のならない先生でした。私は大学院に入ってイスラム研究を始めただけに，修士修了までに三年かかりましたが，幸いなことに，私が修士論文を提出した時には，先生は米国ハーバード大学に留学中ということで，論文審査には立会われませんでした。もし立会っていれば，三年では済まなかったのではないかと思っています。

その後，私は1965年，つまり博士課程三年目に，フルブライト留学生としてハーバード大学に留学しましたので，再び先生と接触するようになったのは，五年後帰国した1970年からです。その間，周知のように，「東大紛争」がありました。私は外国にいましたので，その間の先生については直接的には何も知りませんが，私が帰国したということで，渋谷か何処かのビアホールかビアガーデンで御馳走になったのを憶えています。それまで私は，何人もの先輩たちの歓送迎会に出たことはありま

すが，自分が歓迎されたのは初めてで感激しました。しかし，その時，お会いした時の第一印象は，随分老けたなぁ，ということでした。紛争中の御苦労がしのばれました。

当時の私は帰国はしたが，家族をかかえて失職中でした。そんなわけで，先生にはいろいろ御心配をいただきました。その頃企画中の『宗教学辞典』の項目選定などのアルバイトを世話して下さったのも先生でした。思えば，この『辞典』に注がれた先生の情熱とエネルギーは相当なものでした。私はこの辞典は事実上の先生の労作だと思っています。続いて，同じく東京大学出版会から『宗教学講座』全四巻を企画し，刊行されました。四十代後半のいわゆる「働き盛り」でした。同じ年頃の今の私には到底及びもつかない活躍振りでした。

幸い私は翌1971年から東洋文化研究所に奉職の機会を与えられ，同時に宗教学の大学院担当にもさせていただき，研究室スタッフの末席を汚すことになりました。その間先生は，学部学生に対してイスラム研究を奨励し，かつ強制もして下さいました。そうでもしなければ，当時は誰もイスラム研究を志すようなことはなかったし，現に私自身もそうでした。こうして鎌田繁君などは半ば強制的にイスラム研究を勧められたと聞いています。もしそういうことが無かったとすれば，新設のイスラム学研究室は助手なしのスタートということになっていたかもしれません。

先生はきわめて温厚な方であり，特に私が大学院担当として参加するようになってから，年と共に大ようになってこられたように思われます。私などが入試などで厳しい評価をすると，まあまあと助け舟を出すのはいつも先生でした。私は先生が怒りをあらわにしたのを見たことがありません。ただ一度，かつてN君が綜合ゼミで岸本先生編「世界の宗教」について，研究発表の中でことのついでに批判的な言辞を発したのに対して，色をなして怒られたのを憶えているだけです。

今後も御自愛下さり，御活躍を期待しております。